旭川志峯高等学校

２０２５年

ヤングケアラー

実態調査報告

永山地域包括支援センター

アンケート概要

本調査は、『今後どのような支援ができるか』について考えていくために旭川志峯高等学校のみなさんから，調査した結果をまとめたものです。
北海道で行われた調査との比較も一部記載しています。

調査期間	回答数
2025年10月15日 ～11月30日	333名

調査概要

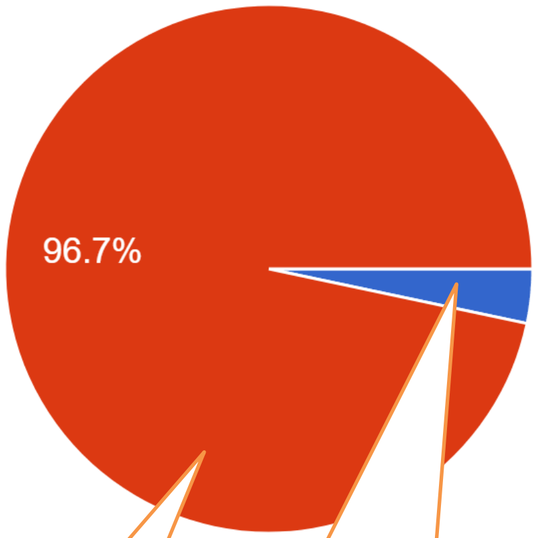
【目的】　高校生の日常生活における
家族のお世話（ヤングケアラー）の
現状を把握し、支援の必要性を検討する。

【対象】　高校１年生～3年生（回答数　333名）

【回答者属性】３年生（44.6％）
２年生（28.9％）
１年生（26.5％）

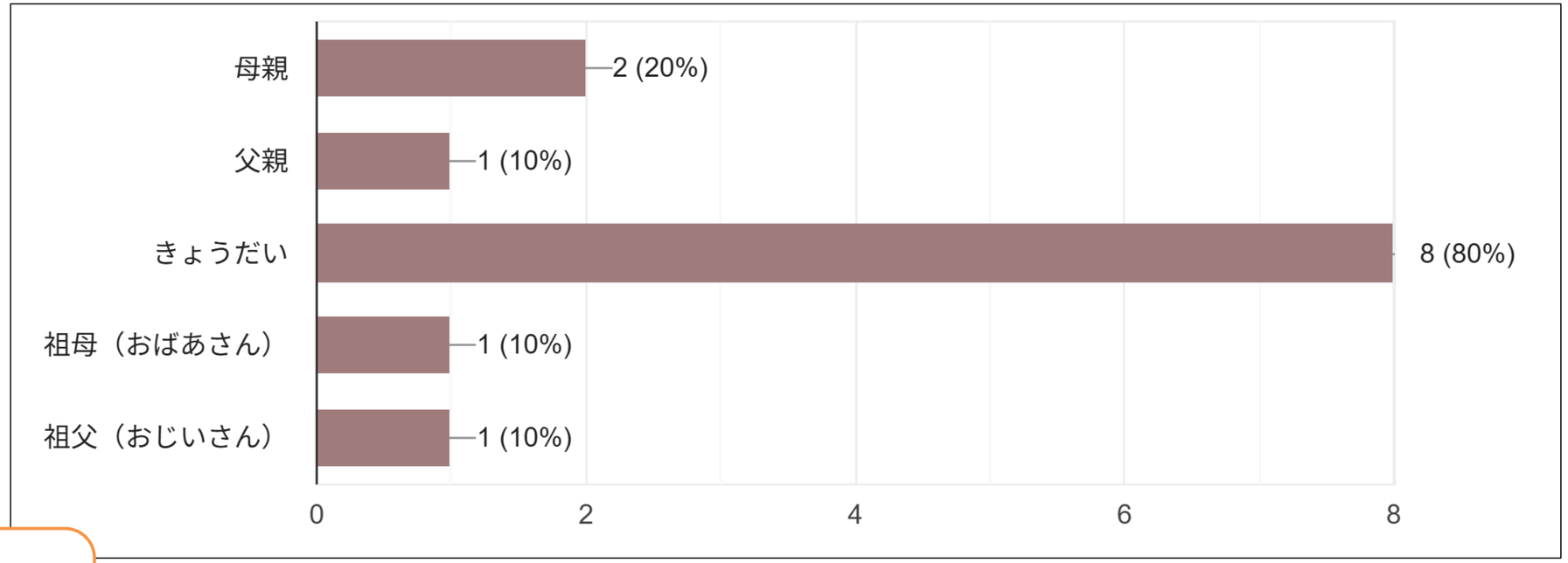
ヤングケアラーの対象

（n＝332）



お世話
していない

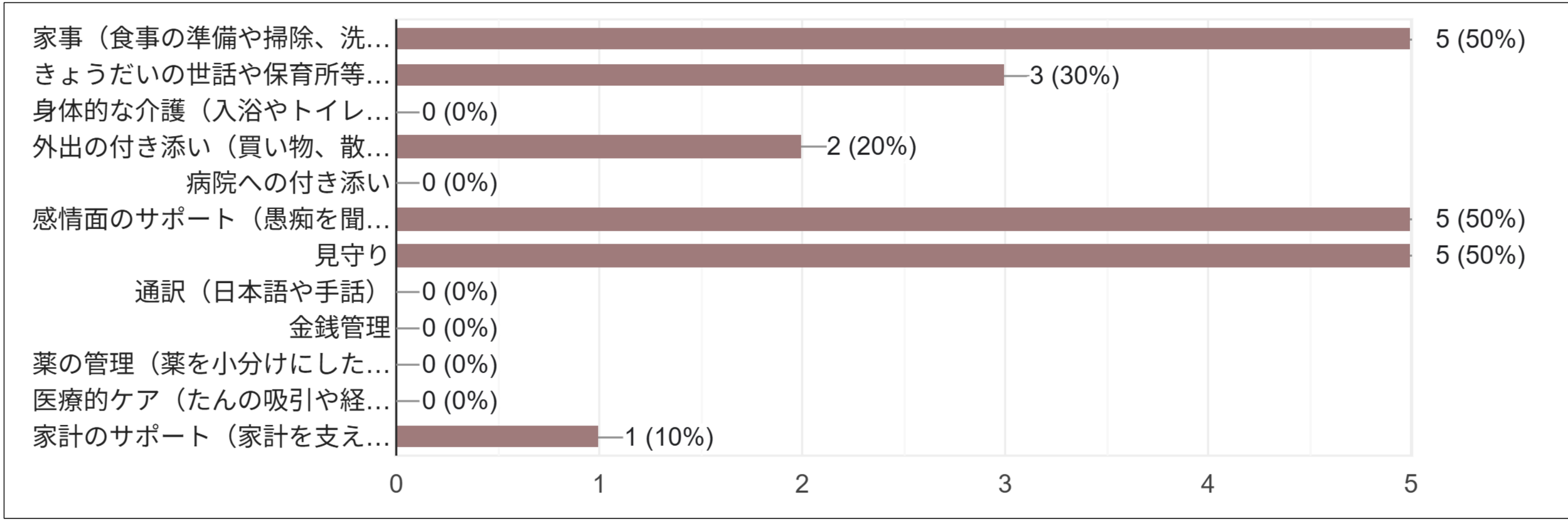
お世話している人
10件（3．3%）



「きょうだい」をお世話している方が
８人（2.4%）となっている。
北海道の調査結果でも、「きょうだい」を
お世話していると答えた方が47%であり
最多であった。

ケアの内容

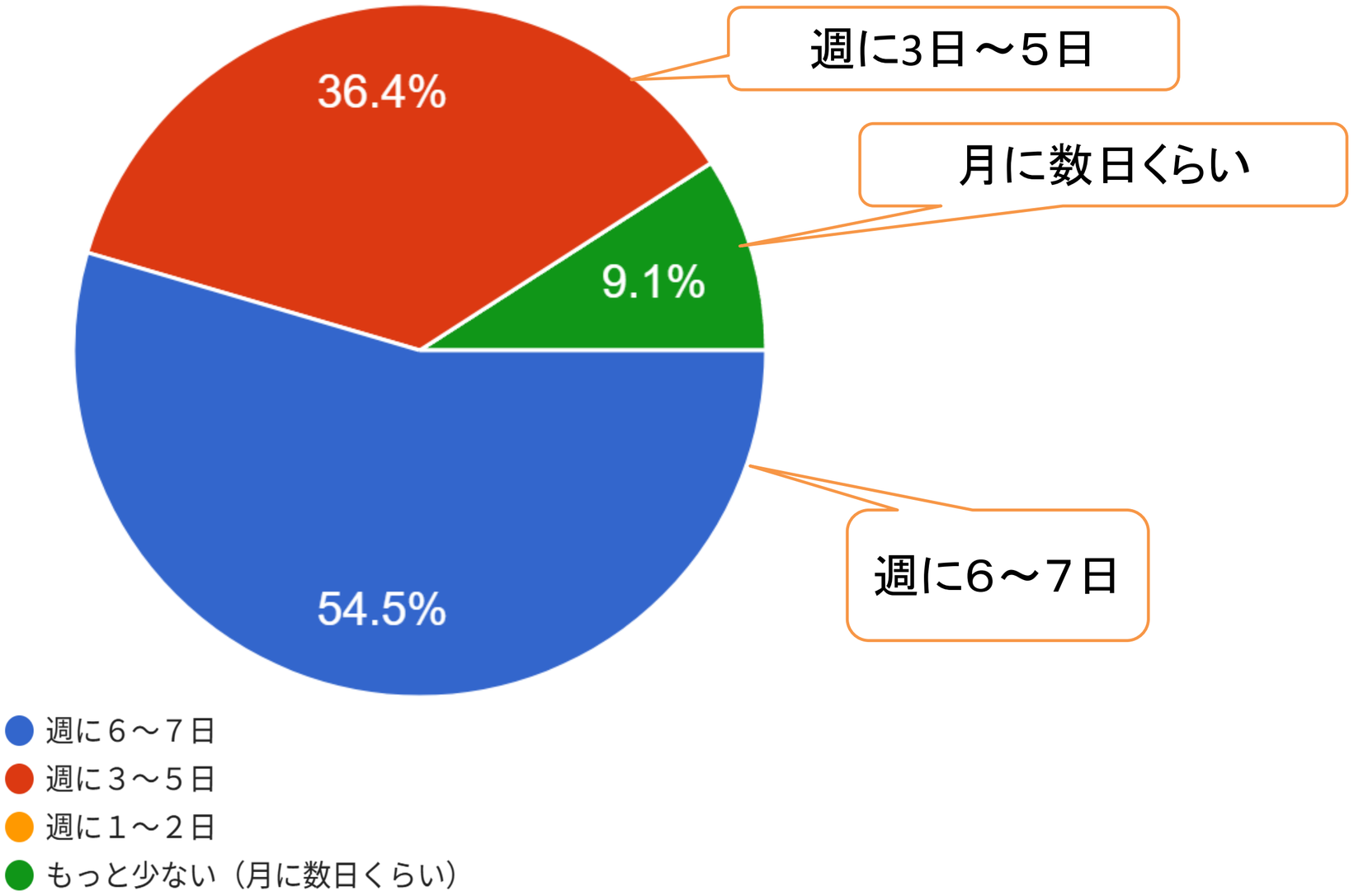
（n＝10）



食事のお世話や感情面でのサポート、見守りなど、**ケアの内容が多岐**にわたっている。家計のサポートをしている生徒もおり、**経済的な課題**がみられる。

ケアの頻度（1週間のうちどのくらいケアしているか）

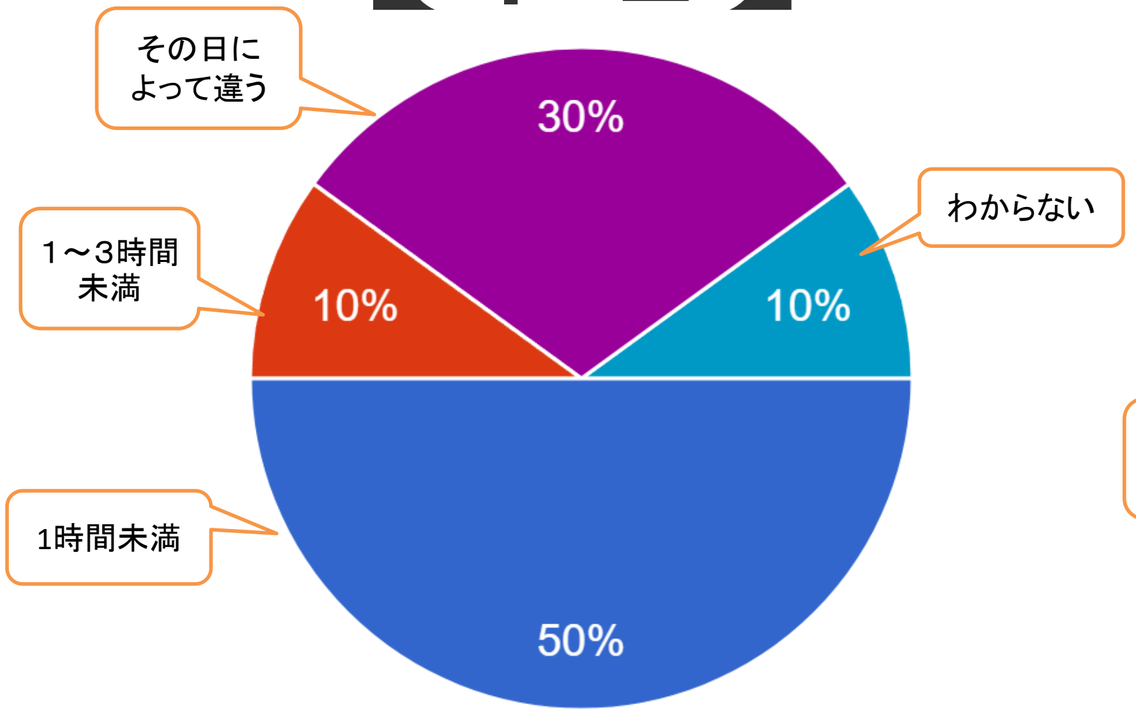
（n＝11）



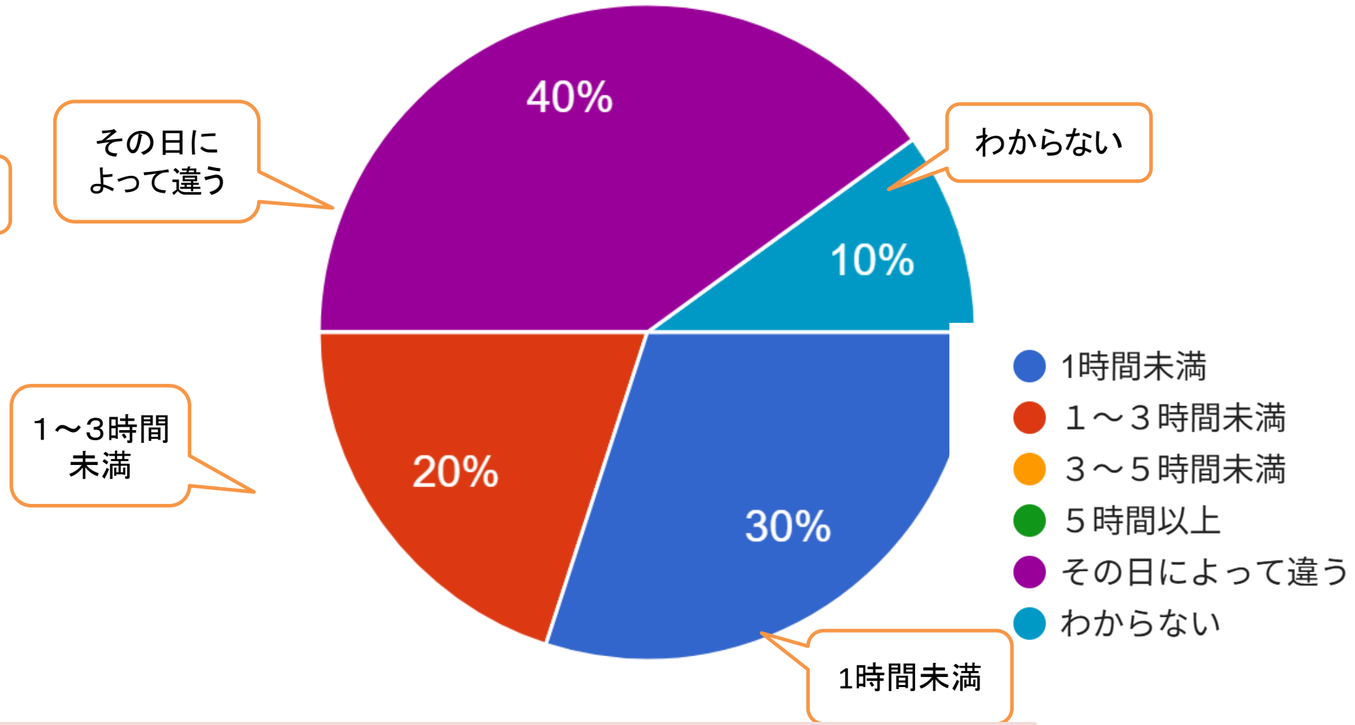
ほぼ毎日ケアにかかわっている生徒が50％を超えている。

ケアの頻度（時間）　（n＝10）

【平日】

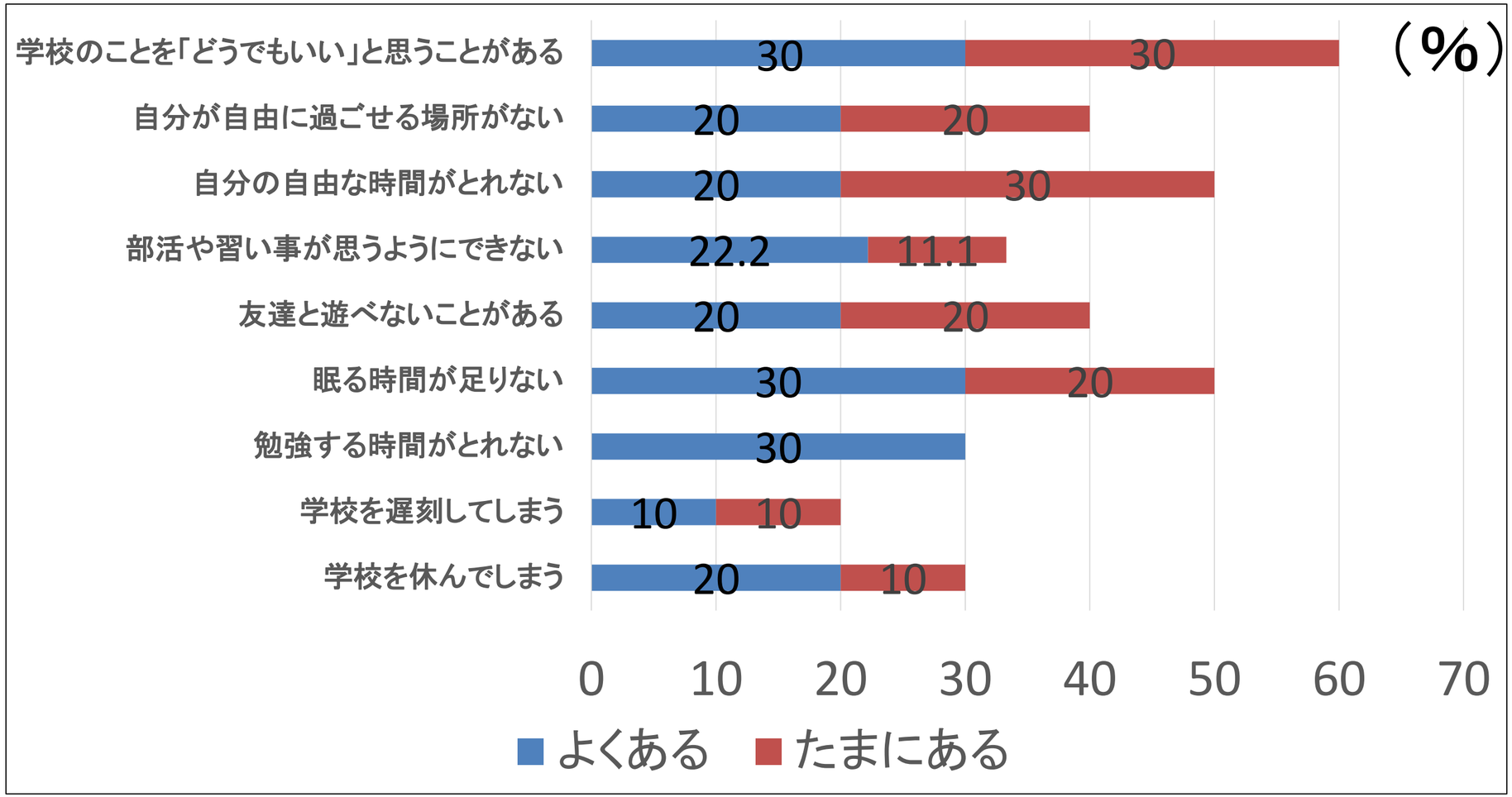


【土日】



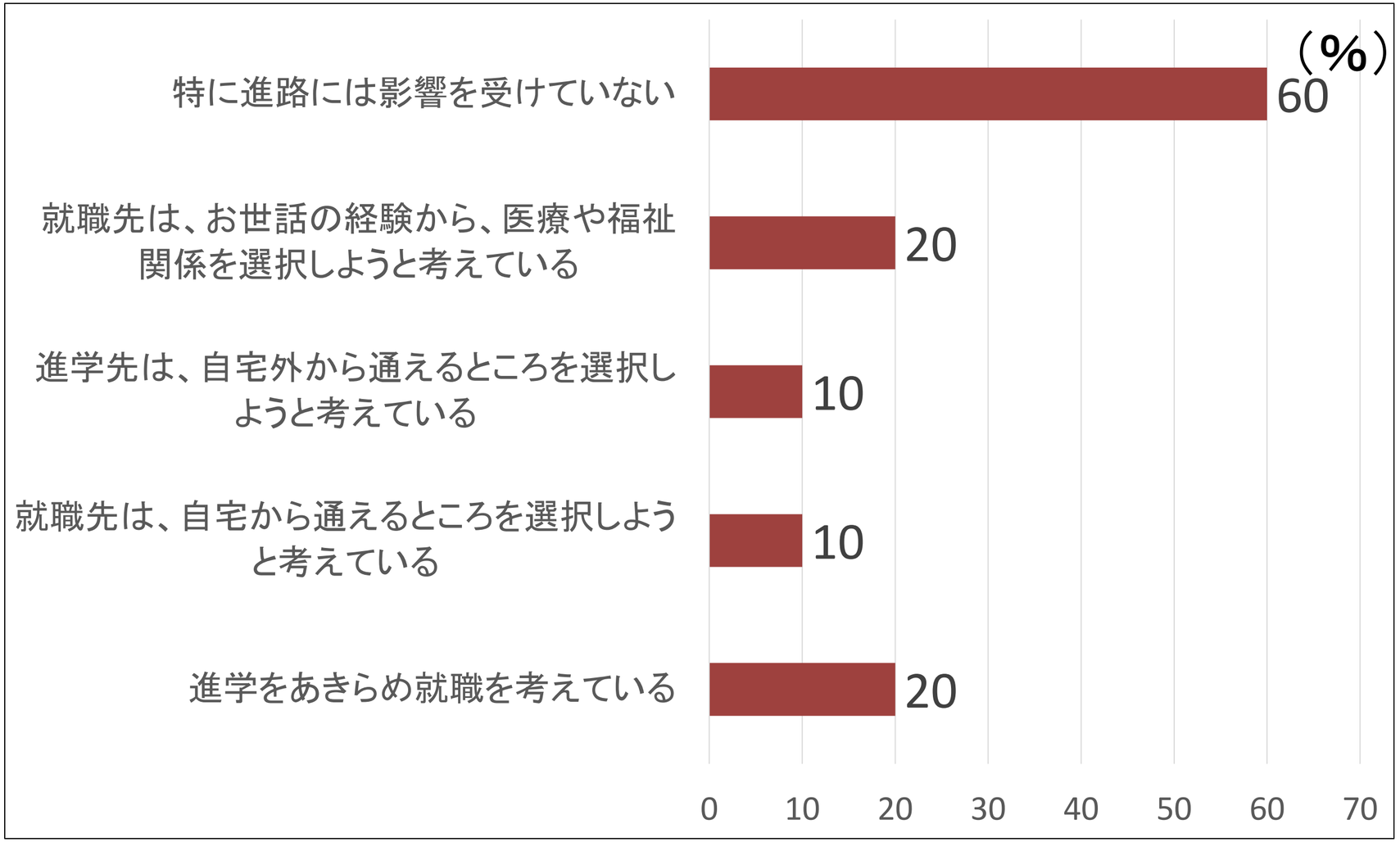
平日のケアの時間が１時間未満（50%）が多い。
土日はケアの時間が増えている。
　１～３時間未満：平日（10%）⇒土日（20%）

ケアが学校生活に与える影響（n＝10）



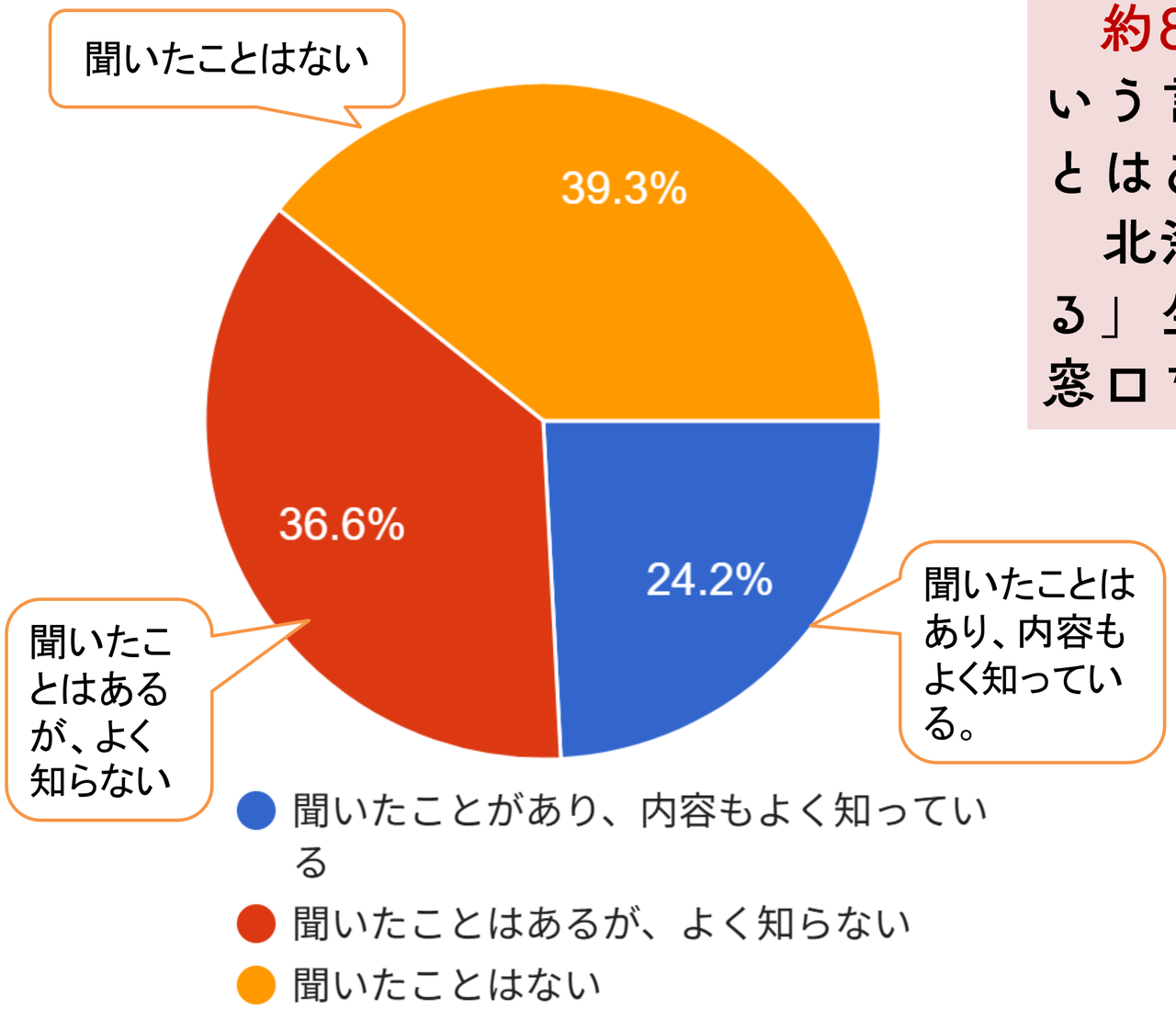
「学校のことをどうでもいいと思う」「自由な時間がとれない」「眠る時間や勉強する時間が足りない」など**学校生活に支障**をきたしている。
ケアによって**「学習」と「休息」という成長期に不可欠な時間**が奪われている。

ケアが将来に与える影響　（n＝10）



進路に影響を受けていない（60%）方がいる一方で、**進学をあきらめている（20%）**生徒もいる。
ケアの経験を活かし、**医療・福祉関係に就職先を考える方（20%）**もおり、ケアの経験が将来の選択に直結している層が存在した。

ヤングケアラーの認知度　（n＝331）

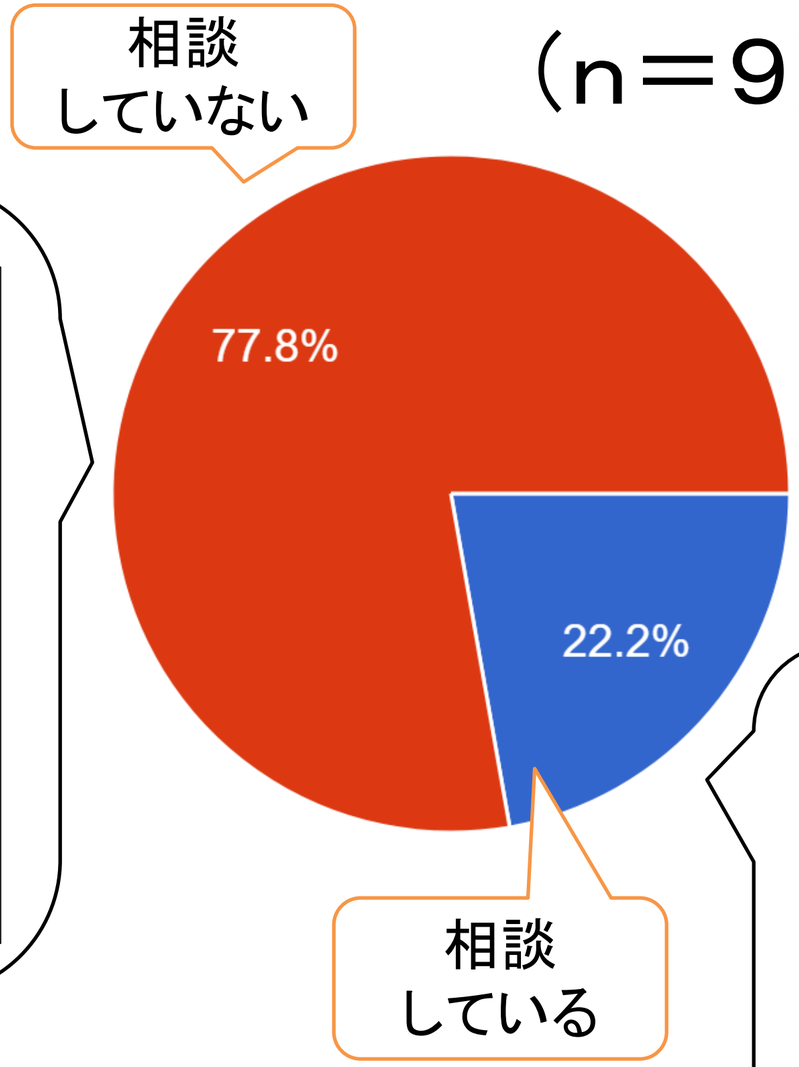


約80％の方が、「ヤングケアラー」という言葉を聞いたことがない、聞いたことはあるが、よく知らないと答えていた。

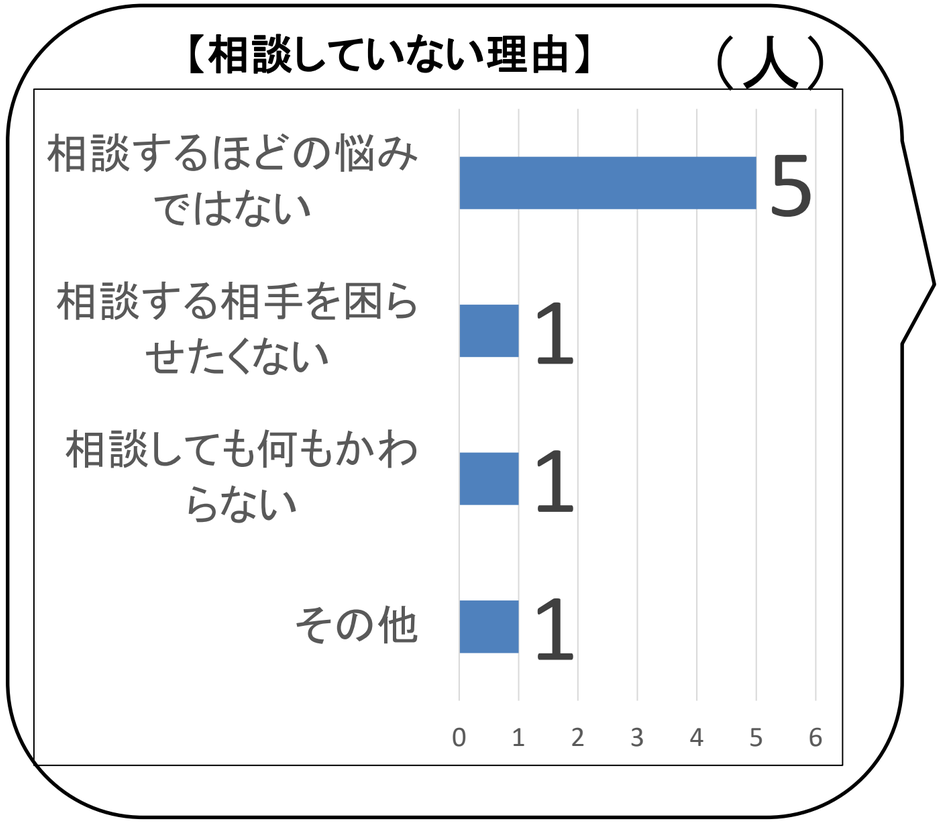
北海道の調査でも「聞いたことがある」生徒は高い割合でしたが、具体的な窓口を知っている人は少なかった。

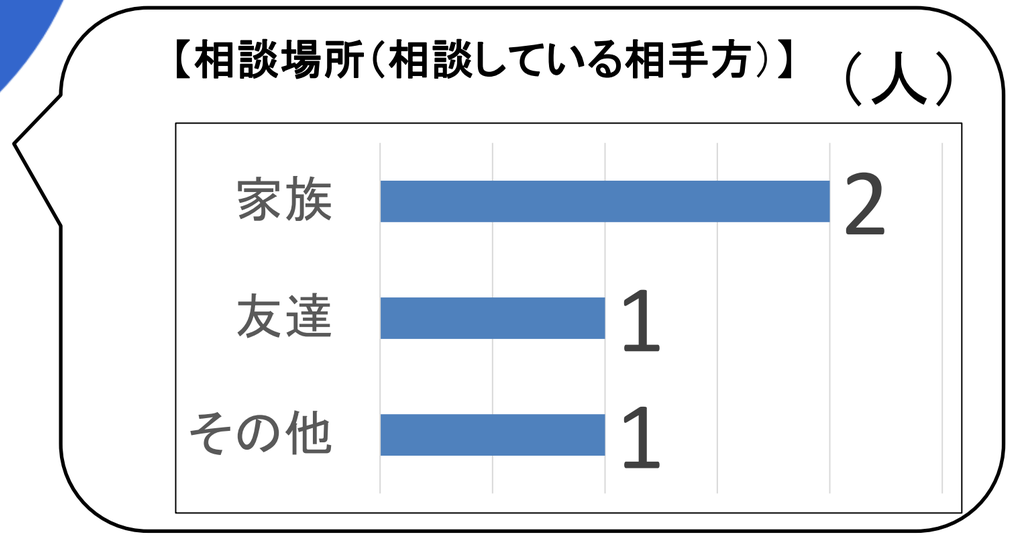
相談状況・相談場所・相談しない理由

（n＝9）

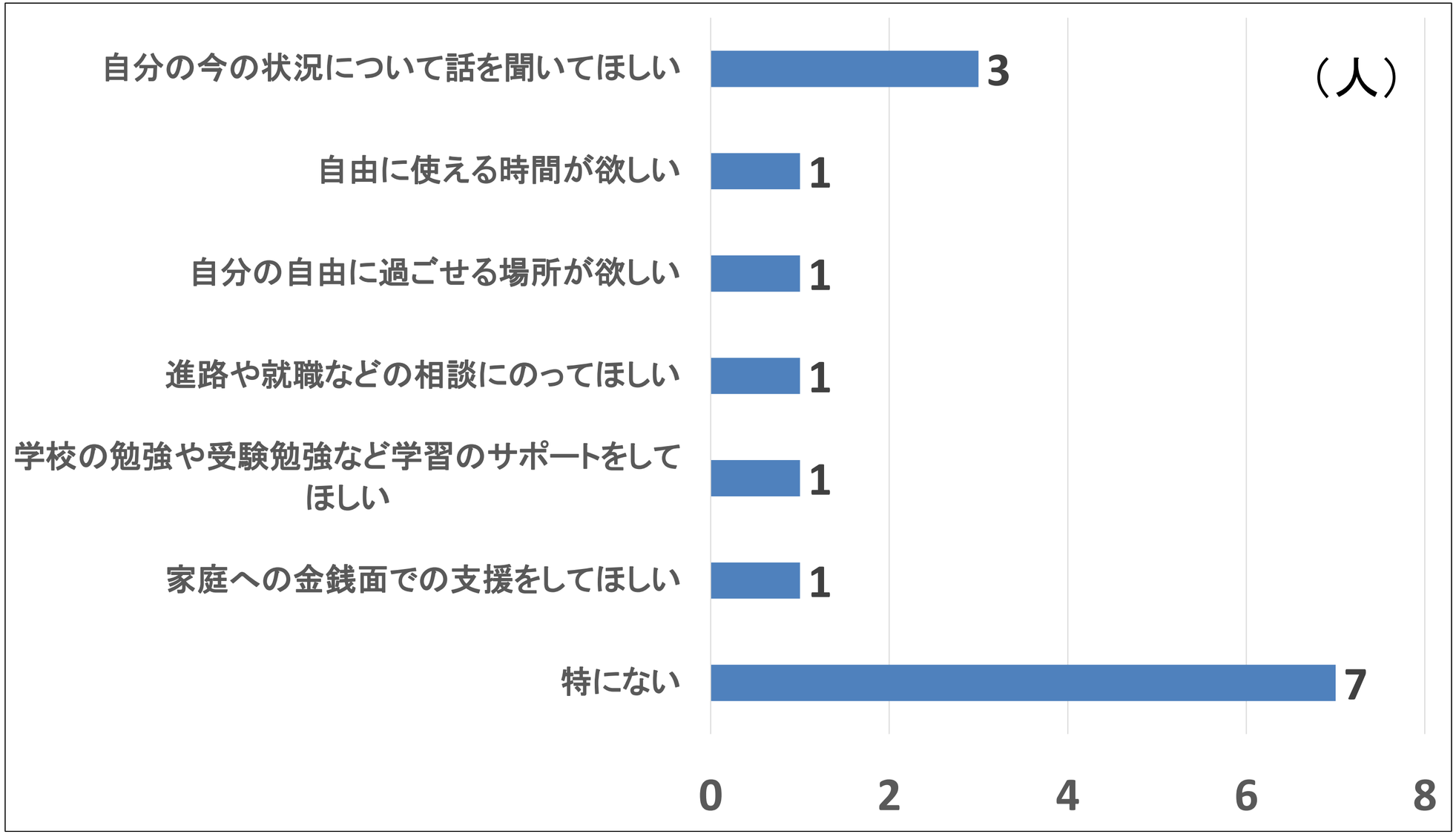


相談するほどの悩みではない（5人）など**相談していない方が80％**いる。
相談は、家族・友達となっており**専門機関には相談していない。**





支援してほしいこと（n＝10）



まとめ

潜在的な問題を抱えている可能性がある

ケアラー自身は、支援に関して「特にない（7人）」が多い一方で「今の状況について話を聞いてほしい（3人）」「家族のお世話について相談したい（3人）」「自由に使える時間がほしい（3人 ）」と**精神的・時間的なゆとりを求める声**がありました。

相談できない背景がある

ヤングケアラーについて、331名中130名の方が「聞いたことがない」と答えていました。実際のケアラー9名中7名「相談していない」と答えており，相談しない理由は「相談するほどではない（5名）」「相談しても何も変わらない（1名）」「相談する相手を困らせたくない（1名）」と思っていることがわかりました。

アンケート結果に基づく現状分析

ヤングケアラーの認知度

「ヤングケアラー」という言葉を約40%は「聞いたことがない」と答えている。

世話の対象と内容

世話をしている対象は「きょうだい（80%）」が多く，見守り，話し相手，感情面のサポートなど多岐にわたっている。

相談に至らないケアラーの生活背景

「今の状況の話を聞いてほしい」と思っているが、「相談していない（77.8%）」が多数であり、理由として「相談するほどでもない（83.3%）」方が最多であった。

相談相手の不在

困ったときの相談相手として「家族」が多いが，約80%は「相談していない」と答えており，専門機関へのアクセスが極めて低い。

課題

隠れたヤングケアラーの存在

自分が「ヤングケアラー」という自覚がないまま，学業や進路に支障をきたしている生徒が存在する可能性がある。

相談ハードルの高さ

学校の先生には「成績や進路」の相談はできても「家族の介護」という悩みを打ち明けにくい心理的障壁がある。また「大変なのは当たり前」という思い込みや、言葉自体の認知不足が支援へのアクセスにつながっていない可能性がある。

情報伝達のミスマッチ

専門機関の存在が認知されておらず，支援が必要な本人に情報が届いていない可能性がある。

具体的な提案（案）

ヤングケアラーについての啓発活動

周知のためのちらし作成や、要望があれば出前講座など開催いたします。

ケアラー生徒への個別支援

地域包括支援センター（高齢者分野）と障害の相談支援センター（障害分野）と連携し、生徒が担っている介護負担の軽減策を一緒に考えます。

教職員の方の気づきを促すシステム構築

連携シート（教職員の気づきを共有できるシート）の作成や、教職員の方が気づくための勉強会開催の相談にのります。先生が異変を感じた場合の相談や福祉サービス等へ繋げるルートなど一緒に考えます。

おわりに

ご協力いただいた
旭川志峯高等学校のみなさま
ありがとうございました！

今後は学校と地域包括支援センター等相談窓口との連携を
充実させ，結果から抽出された課題解決に取り組んでいきます。

協力者：旭川市立大学　栗田克実教授
　　：きたのまち相談支援事業所